

《研究ノート》

コミュニケーションにおける性差についての考察

— 「車のエンジンがかからないの」を事例に—

松田 哲

Investigating the Sexual Differences in Communication:
From a Conversational Example “I cannot start up the engine.”

Tetsu MATSUDA

キーワード：コミュニケーション，性差

Key Word : communication, gender differences

1. はじめに

男性と女性という性差によるコミュニケーションスタイルの違いは、脳科学の分析・解明から説明されることが多い。言語学者であるD.タネンは男性のする話では「序列」つまり互いの優位性をめぐる競争が重視される傾向があり、女性の話は、「つながり」お互いの親密さや距離が重視される傾向にあることを明らかにした。（『分かり合えない理由』1992）そして、この分析はその後多くの研究者に支持されることになる。しかし、D.タネンはその後の研究で、それらの会話スタイルの傾向は固定的なものではなく、特に家族の中では姉妹といった力関係で変化することも多いとしている。（『男と女』心と脳のサイエンス2010）また、M.グリアンは、これらを脳内化学物質バソプレシンの影響であるとしている。バソプレシンは女性に比べ男性に多く分泌され、それによって縄張り意識

や階層制、競争、頑固さに関係を及ぼすとしているとしている。つまり、男性が相手よりも優位性をめぐる競争が重視されるのは脳内化学物質の影響であるといことである。さらに女性の親和性はオキシトシンという脳内化学物質によるものであり、これにより母親としての慈愛、コトバと感情の結びつき、感情移入に関係を及ぼしているという。（『だからすれ違う女脳と男脳』2005）

脳内化学物質だけの影響に限らず、男性と女性では脳内の言語を司る機能が男性は左脳にしかないのに対して、女性は左脳と右脳の両方に6～7カ所点在しているとM.グリアンは指摘している。その結果、男性は自分の経験したことを言葉で表現するのに苦心し、発する言葉の数も平均して女性の半分程度だという。このことは、心理学者のL.サックスも著書の中で、医学的なデータを論拠に以下のように紹介している。「たとえば脳の左半球に卒中を起こした

男性では、言語性IQが平均で20%低下する。だが脳の右半球で卒中を起こした男性では、言語性IQの低下がほとんどみられない。—中略—女性とは違う。脳の左半球に卒中を起こした女性では、言語性IQが平均で9%低下する。そして右半球に卒中を起こした場合でも、言語性IQは同じように11%の低下がみられる。つまり女性は言語のために脳の両方の半球を使っているということで、男性はそうではない。」(『男子の脳・女子の脳』2006)

これら脳科学の機能論やホルモン、脳内化学物質といった脳生理学の領域は専門家の今後の研究成果を待つことになるが、ここではコミュニケーションの立場から、男性と女性の性差による表現や解釈の違いについて「車のエンジンがかからないの」という男女間の会話をもとに、そのスタイルの違いや解釈の差異について分析をしてみたい。

2. 車のエンジンがかからないの (電話による会話)

この男女間の会話はYouTubeに掲載されたもので、この会話の前に次のような文言が表示される「女性の焦ったとき、テンパった時の特徴がよく表れている。車のエンジンが故障した時のコピペ(全ての女性がテンパった時にこうなるというわけではありません。)

なぜこの事例を示したかという点、この会話文は男性と女性のコミュニケーションスタイルの違いが端的に表れているだけでなく、両者の解釈の違いや問題解決へのアプローチの仕方の差異についても顕著に表現されているからである。性差によるコミュニケーションスタイルの違いを理解していないと、この会話文はよくある面

白い話という認識だけで分析の対象にも上がらないものであろう。しかし、男女の性差によるコミュニケーションスタイルの違いに着目すると興味深い会話文となっている。なお、太字や①～⑭までの番号は、分析がしやすいように筆者が加筆したものである。

①女「車のエンジンがかからないの…」

(A) 男性が問題にした箇所

②男「あらら？ バッテリーかな？ ライトは点く？」

③女「昨日までちゃんと動いていたのに、なんでいきなりうごかなくなっちゃうんだろう。」

④男「トラブルって怖いよね。で、バッテリーがどうか知りたいんだけど、ライト点く？」

⑤女「今日は〇〇まで行かなきゃならないから車使えないと困るのに…」

(B) 女性が問題にしている箇所

⑥男「それは困るね。どう？ ライトは点く？」

⑦女「前に乗っていた車はこんなことなかったのに。こんなの買い替えなきゃよかった。」

⑧男「…ライトは点く？点かない？」

⑨女「〇時の約束だからまだ時間あるけど、このままじゃ困る。」

(C) 女性が問題にしている箇所

⑩男「そうだね。で、ライトはどうかかな？ 点くかな？」

⑪女「え？ ごめん、よく聞こえなかった。」

⑫男「あ、え〜と、ライトは点くかな？」

⑬女「何で？」

⑭男「あ、え〜と、エンジンがかからないんだよね？ バッテリーがあがっているかもしれないから。」

⑮女「何の？」

⑯男「え？」

⑰女「ん？」

⑱男「車のバッテリーがあがっているかどうか知りたいから、ライトは点けてみてくれないかな？」

⑲女「別にいいけど、でもバッテリーあがったらライト点かないよね？」

⑳男「いや、だからそれを知りたいから、ライト点けてみてほしいんだけど。」

㉑女「もしかして、ちょっと怒ってる？」

㉒男「いや、別に怒ってないけど？」

㉓女「怒ってるじゃん。何で怒ってるの？」

㉔男「だから、怒ってないです。」

㉕女「何か悪いこと言いました？言ってくれば謝りますけど？」

㉖男「大丈夫だから。怒ってないから。大丈夫、大丈夫だから」

㉗女「何が大丈夫なの？」

㉘男「バッテリーの話だったよね？」

㉙女「車でしょう？」

㉚男「ああ、そう車の話だった」

㉛女「車のエンジンがかからないの…」

性が問題視したのは、①の「車のエンジンがかからない」という現象である。(A 男性が問題にした箇所)そしてその原因を究明するために、男性はバッテリーに原因があると仮定して②のように、ライトが点くかどうかを確認しているのである。それ以後男性は②、④、⑥、⑧、⑩、⑫、⑬、⑮と8回にわたり原因究明のために「ライト点く？」というアプローチをしている。男性の発言は全部で15回なので、53%を「ライトが点くかどうかの確認」に費やしていることになる。これはこの会話の面白いところでもある。

男性は、「相談事」(課題)に対して「解決」を指向しようとする。ここでの解決策は、ライトが点くかどうかを確認して、もし点かないようなら、バッテリーがあがっている可能性が高いから、次のアプローチは「バッテリーを充電する」という方法に移っていく。もしライトが点くようなら、バッテリーは正常であることから、エンジン本体や他の電気系統などのアドバイスが変わっていくことが予想される。どちらにしても、動かなくなってしまった車を動かせるようにすることが、解決なのである。

ところが、ここで女性が問題としているのは、⑤の「今日は〇〇まで行かなきゃならないから車使えないと困るのに…」ということである。(B 女性が問題にしている箇所)約束までの時間に目的地に辿り着けないことが問題なのである。それは⑨「〇時の約束だからまだ時間あるけど、このままじゃ困る。」からもうかがえる。(C 女性が問題にしている箇所)さらに言えば、この約束相手に迷惑をかけてしまうことや、そのことによってお互いの関係が悪くなってしまっても心配しているのかもしれない。つまり、車が動かないことが問題なのでは

3. 性差に見る問題のとらえ方の違い

この会話の中で、「車のエンジンがかからないの…」という女性からの連絡に対して、男

なく、そのことで約束が果たせないのが問題なのである。したがって、この女性にとって、車のライトが点くかどうかは重要ではなく、男性がそのことに執着して躍起になっているのにも関わらず、いつまでもライトを点けようとしないのである。そしてこの女性は相談した男性との関係性も悪化しそうだと感じて、㉒「もしかして、ちょっと怒ってる？」と相手の感情に配慮する言葉を発している。さらに、㉓では「何か悪いこと言いました？言ってくれば謝りますけど？」と関係を悪化しないよう下手にでて、相手を怒らせないように配慮している。これも女性によく見られるコミュニケーションスタイルの一つだとされている。

つまりここでは、〇時までには〇〇まで到着して、約束を守れる手段が解決方法になる。そうになると、①の「車のエンジンがかからないの…」という女性のはじめの相談内容が元々ずれていることになる。

なぜこうなるのかというと、男性のコミュニケーションスタイルは直接的であり、女性は湾曲的だからである。直接的というのは目的（要件）を伝えるためのコミュニケーションということである。例えば「寒い」から「窓を閉めてほしい」と伝えるのである。寒くなければ、その会話は必要なくなる。一方、女性は同じ状況でも「寒くない？」と同意を求めるようにコミュニケーションをとる。そうすると、「窓を閉める」という解決策以外にも、上着を持ってくる。温かい物を取る。もしくは「大丈夫？」といった反応も期待できる。女性の場合は、周囲との関係を大切にするため、直接的なコミュニケーションを避け、相手に感じ取ってもらうようなコミュニケーションスタイルになりやすい。

従って、もしここで女性が㉔「今日は〇〇まで行かなきゃならないのに、車が使えなくて困るの…」と最初に相談していたら、男性はライトが点くかどうかには執着することなく、別の解決方法を提示したに違いない。例えば、「今から迎えに行こうか？」「バスでは行けないの？」「タクシーを手配しようか？」といった具合である。

さらに興味深いことは、ここでの男性は、女性が困っているという感情をきちんと汲んで対応していることである。③の「昨日までちゃんと動いていたのに、なんでいきなり動かなくなっちゃうんだろう。」という女性の会話に対して、④「トラブルって怖いよね。」という具合である。さらに、⑤の「今日は〇〇まで行かなきゃならないから車使えないと困るのに…」に対しては、⑥の「それは困るね。」のように、「困っている」という気持ちを汲んでいるのである。しかし、それでも「車のエンジンがかからない」がバッテリーに原因があると仮定している男性にとっては「ライトが点くかどうか」の確認に終始してしまうのである。男性に適切なアドバイス（解決策）を提供してもらいたいのであれば、女性は、⑤「今日は〇〇まで行かなきゃならないのに、車が使えなくて困るの…」と最初に相談することである。また男性は、女性の真意がわからないのであれば、「どうして欲しい？」「どうすればいい？」と直接尋ねる方法もある。この会話のままでは、ライトが点くかどうかばかりに執着して、時間までに目的地に行くという課題をまったく解決できない男性に腹を立てる女性と、いろいろ話す割にはいつまでもライトを点けるという簡単な作業をしない女性に呆れる男性という構図は変わらない。ここが読者の笑いと共感を呼ぶのである。

4. 男女のコミュニケーションスタイルの差異

このような男女の性差によるコミュニケーションスタイルの違いは、昨今多くの著書が出版されている。なかには原始生活まで遡り、狩猟をして獲物を獲得しなければならない男性と洞窟で共同生活をして子育てに時間を費やしてきた女性の社会的役割の違いを根源に求めるものもある。その是非はともかくとして、これらの出版物が発行部数を伸ばしているのは、男性と女性がお互いの関係を維持発展させることが難しくなっている社会的背景が関係しているように思われる。

我が国の離婚率は、2010年には35.9%にまで上昇し、3組に1組が離婚しているという状況である。また総務省統計局の調査（2005年）では男性の30～34歳の47.1%、35～39歳の30%が未婚であり、40～44歳でも22%が未婚という状況である。女性で見ると30～34歳の32%、35～39歳の18.4%が未婚であり、40～44歳でも12.1%が未婚となっている。公益法人生命保険文化センターでは、生涯未婚率を男性20.1%、女性10.6%と算出している。つまり、統計的にみると未婚率も離婚率も増加傾向にあることから、結婚も困難であり、結婚しても離婚の可能性が高くなっているということになる。実際に日本結婚相談所連盟（IBJ）によると、2006年12月の段階で、連盟に加盟している結婚相談所の数は100カ所未満、登録会員数は5,000人未満であったものが、2012年6月には、結婚相談所の数は800カ所以上、登録会員数は40,000人超となっている。

これらのことが、すべてコミュニケーションを原因としているわけではないが、このような

男女の関係開始・維持・発展が困難になっている社会的背景からも、性差による異質性に注目が集まることは納得できる。それは、脳の構造やホルモンに限らず、コミュニケーションスタイルや行動パターン、色彩や聴音領域などの身体的機能に至るまでいくつかの差異について多くの研究で検証されてきている。以前であれば、男女の生物学的な性差は、生殖器の形状や体型・体格の違い、または運動機能や子どもを産めるかといった機能面、そして染色体の違いという程度であった。その後アメリカでジェンダー論が展開し始めると、性差は社会的・文化的なものとして捉えられるという経緯がある。そして、昨今の脳科学による男女の性差は再び、生物学的な性差に光りを当てはじめた。もともと男女は違う生物体であると認識して、お互いの違いを認め合いながら関係構築をしていく必要があるというスタンスである。

4. おわりに

今回の事例は、男性と女性のコミュニケーション理解の違いを、特定の会話事例に基づいて分析してみたが、これらは多くの会話のやり取りのほんの一部でしかない。このような性差によるコミュニケーションパターンやコミュニケーションスタイル、そして表現の違いは枚挙にいとまがないほどである。それらの違いの原因を脳科学に求めるか、社会的・文化的な違いに求めるのか、もしくは人間が営んできた原始生活の行動や役割から求めるのかは、研究者の立場によって異なる。その中でも科学技術の革新に伴い、医療機器等の目覚ましい発展により、今後は脳科学の領域で期待される場所である。

「生まれか育ちか？男女の違いはどこで決ま

るか」という問いは、多くの科学者の命題でもあった。アメリカのアトランタにあるエモリー大学の心理生物学専門のキム・ウォレン博士のサルの実験では、人間同様に、オスの子ザルは車のオモチャで遊ぶ時間が長く、メスの子ザルはぬいぐるみのオモチャで遊ぶ時間が長く見られた。（『だから男と女はすれ違う』2009）さらに黒川も人工知能研究開発の立場から「脳には性差がある」としている。（『キレル女 懲りない男』2012）その一方で、田中のように古脳と新脳の様々な機能と関係を緻密なデータを基に検証しながら、性差にアプローチしたものもある。田中はこれら脳科学における性差の研究は思考や行動にも直接関係することから、これらはずしては性差医学や性差医療は考えられないとしている。（『脳の進化学』2004）これらの知見は、男女の違いにつてこれまで後天的な環境論や社会・文化的な影響論に傾斜していた考えを、先天的・生得的な立場に引き戻す動きでもある。

どちらにしても、脳科学の研究成果を待つだけでなく、男女のコミュニケーションの違いや関係構築・維持・発展のプロセスやパターンについて、社会学や心理学など隣接領域においても多くの知見を期待していきたいところである。

参考文献

- 『分かり合えない理由』デボラ・タネン著 田丸美寿々
訳 講談社 1992
- 『脳の進化学』田中富久子著 中公新書ラクレ 2004
- 『だからすれ違う女脳と男脳』マイケル・ブリアン著/藤
井留美訳 講談社2005
- 『男の子の脳・女の子の脳』レナード・サックス著、谷
川漣訳 草思社2006
- 『だから男と女はすれ違う』NHKスペシャル取材班 グ
イヤモンド社 2009
- 『男と女』心と脳のサイエンス02 日経サイエンス社
2010
- 『キレル女 懲りない男』黒川伊保子著 ちくま新書
2012
- 総務省統計局Hp : [http://www.stat.go.jp/data/
kokusei/2010/kouhou/useful/u14.htm](http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2010/kouhou/useful/u14.htm)
- 公益法人生命保険文化センター HP : [http://www.jili.
or.jp/lifeplan/lifeevent/mariage/12.html](http://www.jili.or.jp/lifeplan/lifeevent/mariage/12.html)
- 日本結婚相談所連盟 HP : [http://www.ibjapan.com/
topics/2012/08/](http://www.ibjapan.com/topics/2012/08/)